

器楽演奏の習得過程における先行経験と同世代他者の存在の影響

—小学生を対象にしたグループ・レッスンの縦断的観察から—

日本発達心理学会第23回大会

2012年3月11日

丸山慎・小川純一

【目的】

初めて手にする楽器の演奏技術を学ぶとき、音楽の先行経験や他者とのアンサンブル活動は、学習者にどのような影響を与えるのだろうか。このような問題について検討するため、筆者らは、「ヤマハじゆにあ管弦打アンサンブル(一般財団法人ヤマハ音楽振興会)」という小学生のための器楽のグループ・レッスンを対象にした縦断的観察およびアンケート調査を実施し、器楽の学習過程について分析を行ってきた(丸山ら, 2010)。本稿では、特にレッスンの受講生の音楽的な先行経験の違い(以下の「調査対象」の項参照)に着目し、そうした背景の違いが器楽演奏の習得にどのような影響を与えるのか、そして先行経験の異なる学習者はそれぞれ学び方に特徴があるのかといった点について探索的な分析を行い、その結果の一部を報告する。

【方法】

- ・調査対象: レッソンは、受講者が希望する管弦打楽器のいずれかをグループで学んでいくというものであった。本稿では2名の講師がそれぞれに担当したバイオリンのクラス(1クラス3~7名で最大3クラス)を対象とした。受講者はヤマハ音楽教室においてピアノ・エレクトーンを用いた総合的な音楽教育を受けている小学生(グループ①)と一般の小学生(グループ②:ただし学校の部活動や個人で楽器経験を有していた場合もある)であった。
- ・調査期間: [グループ①]2008年11月-2009年10月(計33回)、[グループ②]2009年7月-2010年7月(計26回)。
- ・調査場所と実施方法: ヤマハ日吉センター(神奈川県・川崎市)
- ・レッスン実施形態: 基本的に楽器別レッスン2回、その後他の楽器との合同レッスン1回というサイクルで実施。アンケートは、調査協力への同意を確認の上、毎レッスン終了時に実施。
- ・アンケートの主な調査項目の内容: レッソンに対する意欲やレッスンに共に参加する友人らに対する意識を調査するために、「今日のレッスンに来る前に、どんなことができるようになりたいと思っていましたか?」、「先生やお友達とレッスンをしていて、“まね”することができたらいいなあと思うことはありますか?」などの質問を設けた。

【結果】

アンケート調査の結果からは、受講生たちが自分なりの目標を設定して意欲的にレッスンに参加していたことがうかがえた。「レッスンでできるようにになりたいこと(今日の目標)」を尋ねた質問に対する回答を、内容の観点から(1)方法・課題への言及(「弓の角度を直したい」など具体的な課題や技術的な解決方法に言及しているもの)、(2)イメージ・願望(「きれいな音を出したい」など音に対するイメージを述べているもの)、(3)その他に分け、グループ別にまとめた(図1)。グループ内では、どちらもイメージや願望に関する回答が多かったが、グループ間で比較すると、具体的な方法や課題に言及した回答は、グループ②の方が多かった。また他の質問項目を概観すると、「〇〇ちゃんのようなきれいな音(を出せるようになりたい)」、「みんなとうまく合わせられるといいなあ」といったグループ・レッスンという状況を反映したと思われる回答も見られ、受講生が共に参加している同世代他者からも様々な影響を受けていたことが示唆された。

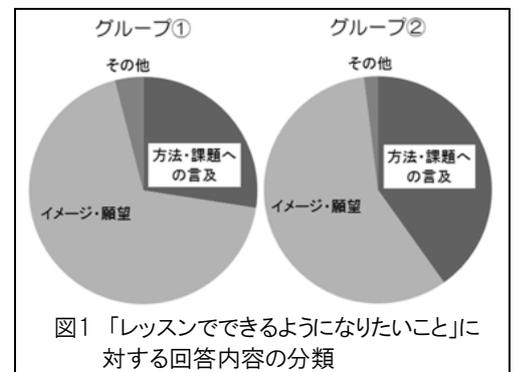


図1 「レッスンでできるようにになりたいこと」に対する回答内容の分類

【考察】

ヤマハ音楽教室でのレッスン経験を持つグループ①の受講生は、すでにエレクトーンやピアノといった比較的自由に演奏ができる楽器があることを反映しているのか、たとえ楽器が変わっても、音に対するイメージが技術的な側面よりも先行しやすかったといえるのかもしれない。一方、グループ②の受講生は、音に対するイメージを具現するための技術的な課題をやや強く認識し、その課題を克服する方法を模索する傾向があったといえるのかもしれない。こうした差異が音楽経験のどのような側面から生じていたのか、そしてある楽器の演奏経験が、認知的および身体的な観点から他の楽器の学習を促進していたといえるのかといった点については、引き続き検討していく必要があるだろう。

・丸山慎、菊池満、滝山聖士(2010) 器楽のグループ・レッスンにおける学び. 日本教育心理学会第52回総会発表論文集 p.677.